

誕生のあゆみと、ねがい

みなさまにおかれましては、いよいよご清栄のことと、お喜び申し上げます。「日本を美しくする会」相談役の鍵山秀三郎さん（株式会社イエローハット創業者・取締役相談役）と塚越寛さん（伊那食品工業株式会社代表取締役会長）の対話集『幸福への原点回帰』をお届けいたします。

発刊にあたりまして、制作日誌をもとに、本が誕生するまでの二年間の日々を振り返ってみました。

【1】 2005（平成17）年末、翌年3月4日（土）夜に長野県小布施町で開催された「小布施掃除に学ぶ会年次大会」の初日の催しとして、鍵山秀三郎さんのご講演が決まりました。北村三郎さん（人と情報の研究所代表）と白鳥宏明さん（日本を美しくする会・伊東掃除に学ぶ会代表世話人）にご助言をいただき、文屋として「講演録」を発刊する構想がかたまり、お二人の橋渡しにより、鍵山さんにご快諾をいただきました。

北村さんとの出会いのきっかけは、2004（平成16）年夏に私どもが発刊した、塚越寛さんのご著書『いい会社をつくりましょう』でした。北村さんは当初、読者のお一人として私にご連絡をくださり、親交が始まりました。2005年夏、北村さんに白鳥さんをご紹介いただきました。

ですから本書『幸福への原点回帰』の誕生は、塚越さんの『いい会社をつくりましょう』の出版と、鍵山さんが相談役をされている「日本を美しくする会」が生みの親、ということになります。

【2】 2006（平成18）年3月4日、年次大会初日の講演会を音声と写真で記録。翌日5日（日）の小布施中学校における掃除に学ぶ会で、鍵山さんのご指導風景などを、カメラマンの関真澄さんが撮影しました。

【3】 講演録として編集する準備を進める中で、鍵山さんが塚越さんの伊那食品工業株式会社の本社「かんでんぱガーデン」における掃除の徹底ぶりや、「いい会社をつくりましょう」を社是とした塚越さんの経営のすばらしさに、敬愛の念を抱かれていることを知りました。

また、塚越さんも、10年ほど前に鍵山さんが「かんでんぱガーデン」を初めて訪れ、懇談をなさって以来、再会の機会がなく、お会いしたいと願っておられることを知りました。

お二方のご意向を私から北村さんにお伝えしたところ、北村さんより、「それならば、お二人の対話集を編集してはどうでしょうか？ 鍵山先生の講演の記録も、対話集を編む上での、大事な柱として活用すればよいです。いま、この時期に、お二人の対話の実現し、世に問うことは、ほんとうに意義深いものになるはずですよ」というご趣旨のご助言をいただきました。

この段階で、北村さんが本書のプロデューサーのお役目を引き受けてくださることを、正式に表明していただきました。私どもにとりましては願ってもないことであり、有難く、お願い申し上げます。

北村さんより「対話の司会は白鳥宏明さんをお願いしてはどうでしょうか。白鳥さんは、鍵山先生から深い信頼を寄せられ、地元の伊東市での掃除にとどまらず全国の掃除に学ぶ会に参加して、各地のみなさんとの学びを深めていらっしゃいます。これからさらに伸びていかれる白鳥さんにとっての初めての書物として、登場していただきましょう」とご助言をくださいました。白鳥さんは、戸惑われ、恐縮されながらも、お引き受けくださいました。こうした経過の後、鍵山さんと塚越さんは、対話集の発刊にご快諾をくださいました。

【4】 取材の方針として、お二方が、それぞれのお城（本社）を訪ね、ゆっくりと語り合っていたいただくことを、決めました。これは、ご多用なお二人にとっては、至難の調整でしたが、お二方の秘書役のご尽力もあり、実現の運びとなりました。鍵山さんの秘書は清水昭子さん、塚越会長の秘書は宮下沙代さんです。

鍵山さんにとっては、数あるご著書の中でも経営者をお相手にした対話集は例が少なく、「掃除」を原点に、人生や経営など幅広い視野の本になることが期待される企画です。

塚越さんにとっては、『いい会社をつくりましょう』の姉妹編ともいえる本の誕生となります。

【5】 対話1回目 2006（平成18）年6月7日（水・晴）朝9時30分、塚越さんがイエローハット本社（東京都目黒区）を訪問。本書の最初の対談が実現しました。塚越さんは前日に上京され、都内の宿泊にご宿泊して、臨まれました。

対話の前に、私ども（木下、本書の編集主幹である中島敏子さん、関カメラマン）、そして早朝に伊東市を車で出発された白鳥さんが、イエローハット様の社員のみなさんによる朝の街頭清掃に参加させていただきました。鍵山さんよりじきじきに、お掃除のご指導をいただくことができました。



イエローハット本社近くの公園に同社が設けた、落ち葉や雑草を堆肥にする木枠（手前）の前で。左から塚越さん、白鳥さん、鍵山さん。

2時間半、最上階の応接室にて対話。録音と撮影。それから車で恵比寿ガーデンプレイスの「ウェスティンホテル東京」のレストラン「龍天門」へ。鍵山さんのご招待で、塚越さん、白鳥さん、私どもスタッフが、ご馳走になりました。こちらでも一時間ほど、対話を収録しました。

【6】 対話2回目 同年10月11日(水・曇りから小雨)
午後1時4分、特急あずさにて、鍵山さんがJR岡谷駅に到着。白鳥さんと私どもスタッフがお出迎えし、車で「かんでんぱぱガーデン」(長野県伊那市)へ。塚越さんのご案内でガーデンを見学の後、伊那食品工業本社会議室にて約3時間の対話。夕刻、車で、同社の保養施設「木曾山荘」へ移動しました。

旬の素材をふんだんに生かした、社員のみなさん手作りの夕食をいただきながら、約2時間、対話。

信州の静かな山奥、夜、お酒も召し上がったせいでしょうか。お二人とも、ご両親、とくにお母様の思い出を語られながら、目頭を押さえる光景が見られました。

翌12日(木・晴)。早朝に山荘で一時間ほど対話の後、車で「かんでんぱぱガーデン」へ移動。朝7時45分に到着。すでに社員のみなさんが始めていらした朝掃除に参加。鍵山さんは塚越さんと歩かれながら、社員のみなさんに笑顔で声をかけていらっしゃいました。朝礼で鍵山さんがご挨拶。心からの感動と激励のお言葉を語っておられました。ラジオ体操にも参加。終了後、「かんでんぱぱホール」の喫茶室にて、軽い朝食をいただきながら、対話2時間。朝10時過ぎ、鍵山さんは車で出発されました(JR木曾福島駅より岐阜方面へ)。



若い社員の朝掃除を見守るお二人。
かんでんぱぱガーデンにて。

【7】 対話3回目 2007(平成19)年4月25日(水・晴)
鍵山さんが名古屋市での早朝街頭清掃を終えられたその足で、車にて「かんでんぱぱガーデン」へ。「日本を美しくする会」会長の田中義人さん(東海神栄電子工業株式会社社長)、イエローハットグループの幹部の方々など、十数名とともに、塚越さんの会社を再訪されました。会議室にて、お二人の対話を中心に質疑を交わすかたちで、3時間。

ガーデン内を見学の後、駒ヶ根の温泉宿「ビューホテル」へ。入浴後の懇親夕食会に、塚越さんがとっておきのワインを手土産にお越しください、2時間、対話。

翌26日(木・晴)朝7時45分、朝掃除を見学。朝礼とラジオ体操の終了後、1時間、喫茶室にて対話。

以上、対話は3回、合計18時間に及びました。そのすべての音声収録。専門家・斎藤雅子さんがテープ起こしをした素原稿の編集に、中島敏子さんが取り組み始めました。

5つの柱=章に分けて構成する案を中島さんが提案。5章構成を前提に、すべての文字情報を再編集し、書き改める過程を約2か月間で行い、お二人による校正の段階に入りました。

【8】 追加インタビュー1回目 同年7月13日(金・晴)

3回の対話を終えたとき、鍵山さんがご提案くださいました。「対話の原稿がまとまった後、もう一度ずつ、今度は個別にインタビューを受けるかたちで、言い足りなかったことや修正点などをお話ししましょう」。私どもにとっては、願ってもないお申し出でした。塚越さんご快諾くださいました。

鍵山さんを本社に訪問。白鳥さん、木下、中島さん。素原稿をお読みいただいていた鍵山さんより、細やかなご指摘をいただきました。また私どもの疑問点にも、詳しくお答えくださいました。その場に居合わせた人たちだけでなく、この本を手を読まれる方々など、あらゆるみなさんへのお心配りをなさる鍵山さんのお言葉一つひとつに、“仕事即学び”を実感する幸福な時間でした。

朝九時より、昼食をはさんで4時間半。午後1時30分に同社を辞しました。

【9】 追加インタビュー2回目 同年8月11日(土・晴)

午後2時。塚越さんを本社に訪問。木下、中島さん。約1時間、塚越さんより、修正のご指示を頂戴しました。修正箇所は少なかったのですが、「一つだけ気をつけてほしい」と次のことを仰せつかりました。「この本は、人や企業、団体などに、それぞれの原点に立ち返ることこそが真の改革である、とお伝えする本です。現状に甘んじている人にとっては、かなり手厳しい内容になります。それだけに、せめて言葉の表現は、あまり鋭いものにならないように、心を配ってください」。

【10】 追加インタビュー3回目 同年9月20日(木・晴)

午後3時。塚越さんを本社に訪問。木下、中島さん。約1時間、最終確認のご指示をいただきました。

【11】 本文の原稿を確定してから、お二人の「まえがき」案を執筆。白鳥さんが「志ネットワーク」代表の上甲晃さんに、本書の推薦文をいただくことをお願いしていただき、上甲さんにご快諾をいただきました。激務の合間を縫って上甲さんよりほどなく、原稿と筆字のご署名が届けられました。10月10日までに、ご著者のお二人より、原稿の修正のご指示と、ご承諾をいただきました。

装丁と本文のレイアウトは中村仁さんが担当。11月30日までにお二人よりゲラの最終確認をいただくことができ、12月3日、有限会社アオヤギ印刷さんの印刷機のスイッチが押されました。12日、製本会社のダンクセキ株式会社さんから本書は届けられました。芽出度し、愛でたし!

★ ★ ★

これが、2年間にわたる本書の取材と執筆、編集の流れです。お二人ともご多用の日程を押して、私どものわがままに、真正面からおつきあいくださいました。その真摯なご姿勢に、学びつづける機会をいただきました。北村さん、白鳥さん、玉稿をくださいました上甲さん、編集にご助言をくださいました「日本を美しくする会」会長の田中さん、原稿を通読してご教示くださいました頼経健治さん。編集から印刷・製本まで、それぞれのプロとしての腕前を発揮してくださったみなさん。

たくさんの想いが集まり、この1冊に結晶しました。広く末永く読み継がれ、お一人でも多くのみなさまのお役に立てるように努めることをもって、ご恩に報いてまいりたいと思います。感謝を込めまして。 文屋 代表 木下 豊 拝